

昭和63年7月豪雨による広島県北西部の災害速報

1988年(昭和63年)7月20日(水)から21日(木)にかけて広島県北西部を襲った集中豪雨は、広島県山県郡加計町、戸河内町を中心に甚大な被害をもたらした(口絵写真5~6ページ参照)。この豪雨は、日本海南部から朝鮮半島中部にかけて延びていた梅雨前線が、オホーツク海高気圧の強まりとともに南下し、これに湿った空気が入り前線活動が活発になり、20日夜半から21日未明にかけて局地的な豪雨をもたらしたものである。降雨状況は加計町で総降雨量264mm、3時間雨量127mm、最大時間雨量57mmという記録的な短時間豪雨であった。この豪雨による被害は、広島県消防防災課のまとめによれば8月15日現在、死者14名、重軽傷者11名、住宅全壊38棟、半壊20棟、被害総額175億円(土木関係分122億円)に達している。なかでも、土石流による被害が甚大で、加計町下殿河内地区の江河内谷で発生した土石流では、死者10名、住宅全壊13棟、

半壊12棟にもものぼる被害が出た。この土石流の水平移動距離は約3km、標高差は約550mであり、流出土量は4万m³前後と推定されている。土石流の源頭部の基盤岩は広島型粗粒黒雲母花崗岩であり、その上は強風化花崗岩、いわゆるまさ土、および腐食土で覆われている。崩壊が起こったのはこの上部80~100cmで、傾斜角は約36°であった。このほかにも各地で多数の土石流が発生しているが、その規模、形状は様々で、全貌は今もって把握できないほどである。これらの土石流のなかの一部については現地調査を行ったので、昭和63年10月31日に松山市で開催される「斜面崩壊および地すべりの予知と対策に関するシンポジウム」(土質工学会四国支部・地すべり学会関西支部主催)でその結果を報告する予定である。

(文責:森脇武夫 広島大学工学部第四類)

(原稿受理 1988.9.12)

書籍紹介

日本の地質 4, 中部地方 I

日本の地質「中部地方 I」編集委員会
代表編集委員 植村 武・山田哲雄

同じ出版社による「日本の地質」全9巻のうちの1冊である。本書に取扱われている範囲は、新潟、長野、山梨、静岡の4県であり、フォッサマグナを挟んで東北日本と西南日本とが接するところで地質が複雑であり、地質学上からみてきわめて重要な地域である。

目次に示されるように地層の新旧による区分のほか、火山、海洋、構造ならびに応用部門等の各章に分かれ、それぞれその地域に精通した多数の専門家により執筆されているが、土質工学に特に関係深い第四紀学や応用地質関係の記述もかなり重点をおいて記述されている。

一方、土質工学の方からみた本地域での問題は、地すべり、地盤沈下、液状化、トンネルでの膨圧、ダムの基礎など多岐にわたっているが、これらの現象はいずれも基盤の地質に深く関係している。そこで現場における土質工学的な問題を扱うに当たっては基盤の地質や構造がどのように

あるかを知ることが必須の要件であろう。本書はこのような知識を得る上に大いに役立つものと思われる。地質学的な記載の仕方は、多くの地層名称とともに、土木技術者にとってはなかなかなじみにくいものであるが、本書に多数掲載されている地質平面図や断面図は分かりやすく有用であろう。

目次

- 第1章 総説
- 第2章 中・古生界および古第三系
- 第3章 新第三系
- 第4章 第四系
- 第5章 火山
- 第6章 海洋地質
- 第7章 地殻の構造とネオテクトニクス
- 第8章 地下資源
- 第9章 応用地質
- 第10章 構造発達史の諸問題

B5判 332ページ 1988年6月発行
定価 9,000円
発行 共立出版株式会社 電話03-947-2511